

国内研修報告書

「まち側が移住者を選ぶまちづくり」

研修テーマ：まち側が移住者を選ぶまちづくり

研修場所：神奈川県真鶴町

研修期間：2025 年 2 月 9 日～11 日

研修参加人数：4 人

○はじめに

国内研修を行うきっかけは、ローカルイノベーション論の講義において、今回の研修先である真鶴町で「泊まれる出版社 真鶴出版」を営んでいる川口さんがゲストスピーカーとして話をしてくださったことがきっかけだった。そのなかで真鶴出版が暮らし観光や「今だけ、ここだけ、あなただけ」の観光に取り組み、移住希望者をまちあるきのプログラムに参加してもらい、参加者側だけではなくまち側も真鶴町での暮らしに合うのか判断するという驚きの仕組みがあることを知り、興味を持った。まちあるきとは、参加者は住民と交流し、人間関係を紹介されるため、リアルな暮らしを知れるのである。実際に多数の移住に繋がっており、この取り組みを自分たちの目で確かめ、体験することで、なぜ移住成功事例が生まれるのかを明らかにしたいと考えた。また、真鶴町には「美の基準」というまちづくり条例がある。この条例は昔ながらの港町というまちの美しさを守るために住民が話し合って約 30 年前に作られ、現在も受け継がれている。そのような独自の条例がどのようにまちづくりに反映されているのか、住民はどう感じているかなど、とにかく真鶴町を訪れずにははいられないという好奇心が溢れた。

○研修内容

一日目は宿泊プログラムである、まちあるきに参加した。まちあるきの前にスタッフの方がまちの紹介やまちあるきルートを紹介してくださる時間があった。そこでポロっと「真鶴町はただ残されてきたまちではなく、守られてきたまちなんです。」と言われた。私はその言葉が非常に印象的だった。美の基準を作成してからどこか懐かしいまち並みが守られ続け、そしてそのまちに惹かれ、移住する人がいる。“守られてきた”ということは人の努力なしでは言い表せないことだと思う。真鶴町はいろんな人を“守りたい”と思わせるような不思議な魅力があるまちだと考え、その時まちあるきがますます楽しみになった。

まちあるきでは、「背戸道」と呼ばれる車が通れないくらい細い路地を何か所も歩いたり、昔から守られている井戸を発見したり、と真鶴らしさが随所で感じられた。背戸道に関しては、道が細く狭いため住民のコミュニケーションの場にもなると言う。実際、住民の方とあ

いさつを交わすこともあり、地方出身の私にとっては道で出会った人とあいさつするという文化に懐かしさを覚えた。このまちあるきを通して、日常の暮らしがどれほど大切で、人が交わるコミュニティを守り続けることがまちづくりには重要であると感じた。

二日目は、真鶴出版の川口さんへのインタビューを行った。ローカルには余白があるからこそおもしろく、暮らしを自分たちの手で自由に作ることができると語ったことが私は印象的だった。さらに、ローカルイノベーション論の最終講義で「ローカルとは何か」を受講生と先生方で考えたことが記憶にあり、川口さんの考える“ローカル”を聞きたかったため質問した。すると川口さんは「都市や地方関係なく、どんな場所にもローカルは存在する。その地域に根ざしている、暮らしを支えるヒト・モノ・コトをローカルと指すと思う。しかし、ローカルと繋がっていない状態は隣人の顔を知らないとか、住んでいるまちの人と会話をしないとかを指すのではないか。」と答えてくださった。私はこれを聞いて、真鶴町はまさにローカルそのものであり、人との繋がりを感じながら愛着を持ち、豊かな暮らしを育める地域だと感じた。また、川口さんのお話を聞くだけにとどまらず、私たちの感じている地域のおもしろさや課題を伝え、リアルなディスカッションの場になったことが、国内研修の“オフラインで人と話す”という魅力を体現していると感じた。

その後、まちに赴き、住民の方にインタビューを行った。最初に出会った80代の女性が「美の基準」を決定するに至った当時に関わっていた方であり、当事者目線の真鶴町のまちづくりの歴史を学ぶことができた。偶然ではなく必然の出会いだったように感じ、真鶴の不思議な力を体感したような気持ちだった。それから、50年間真鶴に住んでいる女性にもお話を聞いた。彼女は「移住者が増えるのは嬉しい。しかし昔ながらのお店が潰れるのは寂しく感じる。」と語った。昔から住んでいる人にとっては移住者が増えることに重きを置くというよりは、自分が慣れ親しんだお店が無くなるという事実に着目しているということであった。これが真鶴の暮らしを支えてきた人のリアルであり、「ここで生きることが当たり前」というのが日常とは何なのかを語っているように感じた。また、後継者問題も課題だと語り、人口が少ないまちの高齢化や後継者不足というよくある問題も真鶴にもあることが理解できた。

そして最後には、草柳商店を訪れた。この昔からある酒屋はローカルイノベーション論の講義内でも紹介されており、あーちゃんというチャーミングなおばあちゃんが営んでいる。彼女は、夜になると仕事を終えた漁師さんや住民が集まり、賑やかになると語った。そんな自然に集まりたいと思える場があることが、移住者や昔から住んでいる人にとって暮らしの憩いの場になると感じた。

三日目にも、真鶴に移住した方へのインタビューを行った。本来は、真鶴町立中川一政美術館を訪れる予定だったが、二日目に川口さんへのインタビューを行った際、住民の方の気持ちやお話を直接伺う方が、真鶴ならではのまちづくりや暮らしを学ぶという観点の気づきを得られると判断した。そのため、美術館を訪問する時間を住民にインタビューする時間に変更した。そこで、真鶴で自然の四季が楽しめるという点に魅力を感じ 8 年前に移住した女性にインタビューをした。彼女は 2 児の母親であり、「コミュニティ真鶴」という地域の子どもたちが集まれる居場所づくり支援をされている方である。東京で働いていた時に便利な暮らしに違和感を覚え、不便だからこそ自分たちで生活を考えることができる真鶴に移住したいと考えたと言う。選択肢が少なく、不便だからこそ自由だと語る姿は子育てをしている方ならではの視点だと感じた。また、「人との出会いが繋がっていくまち」という点に住んでみて魅力を感じていると言う。真鶴には高校が無いため、中学校まで地域で教育を受けられる子供たちにとってはコミュニティ真鶴というサードプレイスが地域に愛着を持つきっかけとなる居場所であると感じた。

その後、真鶴に U ターンをされたご夫婦にインタビューを行った。青木商店という先代から受け継がれてきたお店を畳むことになったが、熱海でカフェを営んでいた息子夫婦が場所を受け継ぎ、「青木商店 GLIDE」というカフェを営むことになったと言う。U ターンした理由は、父親が真鶴町議員でまちを良くしたいという想いがあるのを間近で見てきたことが大きく、その想いを自然と受け継ぎ、育ったまちに貢献したいということだった。そしてお話の中で印象的だったのが、「あの人はすごい。」と恥ずかしげもなく息子さんがお父さんのことを言っていたことだった。そして子が場所を継承し、親の想いをそのままお店にまた宿らせることができているのも何よりもの親孝行である。そのような人が住んでいるまちはあたたかく、人のやさしさを常に感じる事が出来る地域であった。私たちがまちあるきで紹介していただいたカフェで、たまたま議員さんとお会いし、真鶴の歴史や美の基準を作った時の思いなどを当事者から聞いたという経験はとても貴重だった。

真鶴を訪れ、暮らしを感じながらまちづくりを学んでみて、人と人が繋がることは地域に大きな力を宿し、愛に溢れるまちになることに直結すると感じた。美の基準を作り、それを守り続けるためには建物の色や高さを基準に合わせるというハード面も大切である。しかしもっと大切なのは、そこに住む人々の暮らしに対する心持ちであると思う。その心持ちを現在そのまちで生きる人々に留まらず、未来のそのまちで生きる人々に継承しなければならない。インタビューを通してお店の後継者不足が課題だと知ることができたが、真鶴に住む人の“心持ち”を継承することが今後のまちづくりをさらに良い方向に進められることに繋がると考える。また国内研修を通して、「いい人がいれば自然といいまちになっていく」という大きな学びを得た。真鶴はいい人がたくさんいて、その人の良さが新たな“いい人”を引き寄せているのだと感じた。